

主の奉献

2020.2.2

ルカ 2・22-40

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日2月2日は、教会の古くからの伝統に従って、主の奉献の祝日として祝われてきました。救い主イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスの祝いから四十日目の2月2日を、教会は今日のルカ福音書の記述に基づいて、主の奉献の祝日として祝ってきたのです。今年は2月2日が日曜日にあたっているので、今日の主日のミサは特別に主の奉献を祝う喜びの中でささげられます。今日の福音を味わうとき、主の奉献の祝日には独特の喜びが満ちあふれていることが分かります。毎年2月2日祝われる主の奉献の祝日の喜びは、言ってみれば、厳しい寒さのなか立春を迎え、春の兆しを感じ取ることが出来た人の喜びのようです。

今日の福音に語られている主の奉献の祝日の喜びにまず最初に包まれているのは、マリア様とヨセフ様です。生後四十日目を迎えたイエス様を胸に抱かれたマリア様と付き添うヨセフ様は初々しい喜びに包まれて、エルサレムの神殿に向かったことでしょう。今日わたしたちが味わう主の奉献の祝日の喜びは、マリア様とヨセフ様が味わわれたにちがいない、お生まれになられたイエス様の初めてのお宮参りの喜びです。そこでマリア様は、律法に定められた慣習に従って産後の清めの式を受け、これも律法に定められているとおりに、はじめて生まれた男の子を神様におささげし、定められたいけにえをささげて、あらためて、神様のものとされたその子を神様の御手から授けていただいたのです。この日ヨセフ様とマリア様は、神様の御前で、またユダヤの人々の中で、晴れてイエス様の両親となられた喜びを噛み締められたにちがいありません。主の奉献の祝日を祝う今日のミサの中でわたしたちも、マリア様とヨセフ様の心を満たしていた喜びを味わわせていただきたいと思います。

このミサの中で、わたしたちは奉納のパンとぶどう酒をささげ、このミサの中に響くイエスのみことばと聖霊の働きによってイエスご自身の体とされた御聖体を天からのパン、いのちの糧としてわたしたちのうちにいただきます。マリア様とヨセフ様の心を満たした喜びに包まれて、わたしたちも今日の祝日のミサに与らせていただきましょう。

マリア様とヨセフ様を包んでいた喜びに最初に与らせていただいたのは、今日の福音に登場するシメオンとアンナです。聖霊によって聖母マリアのうちに最愛の御子を宿らせた神は、その聖霊によって年老いたシメオンに神が遣わされるメシアに会うまでは死なないとの約束を与えられ、彼を導いて今日聖母の胸に抱かれた幼子イエスと出会わせてくださったのです。シメオンを包んだ喜びは、今日の祝日を祝うわたしたちの喜びでもあります。わたしたちも聖霊による神の導きによって教会に導かれ、聖母マリアと出会い、その胸に抱かれた神の御子イエスと出会わせていただいたのです。

シメオンは幼子イエスを腕に抱き、神をほめたたえて歌います。「主よ、今こそあなたは、おことばどおりこのしもべを安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです」。シメオンがこのとき目にしているのは、自分の腕の中に抱きとられた赤子です。その子は他のすべての赤子のように、無心にシメオンの顔を見つめているだけです。それにもかかわらずシメオンは「わたしはこの目であなたの救いを見た」と言っています。シメオンのこのことばは、旧約のモーセの姿を思い起こさせます。出エジプトの四十年に及ぶ旅の幾多の困難を経て、モーセはネボの山の頂に立ち、約束の地の果てから果てまで見ることを許され、自分の使命は果たされたことを悟って、その生涯を終えたのです。今日の福音のシメオンは、そのモーセのように、幼子イエスを腕に抱き、その子によってもたらされる、神の大いなる救いの約束の実現を望み見ているのです。このとき果てしなく広がるシメオンの視界には、彼の腕に抱かれたイエスの十字架の死と復活の彼方に広がる神の救いの世界が広がっていたのです。「これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです」。旧約のイスラエルの民の歴史を担うユダヤの民の中にお生まれになった神の子イエスの十字架の死と復活によって開かれる神の救いの約束は、今日の福音の場面を越えて、万民に向かって広がっているのです。今日の福音のシメオンの目は、幾千年もの時代を超えて、イエス・キリストがもたらされた救いを信じるわたしたちをもその視界のうちに捉えているのです。シメオンが神をほめたたえて歌った賛歌は、神の救いを信じるわたしたちのうちのこだまし、わたしたちの歌ともなっているのです。

シメオンとともに今日の福音に登場するアンナも旧約聖書のルツ記に語られている一人の女性、ナオミの姿を思い起こさせます。ナオミは、飢饉に見舞われた故郷の地を離れて、愛する夫と二人の息子とともにモアブの地に向かいます。その異郷の地で相次いで夫と二人の息子に先立たれ、自分のもとに留まっ

た嫁のルツに付き添われて故郷のベツレヘムに戻って行きます。彼女は迎えてくれた顔馴染みの故郷の人々に言います。「今となっては、わたしをナオミと呼ぶずにマラと呼んでください。全能者である神がわたしを酷い目に遭わせたのです」。ナオミという名前は快いという意味でマラとは苦いという意味であると、ナオミが言いたかったことが解説されています。そのような失意のナオミに神はルツを通して家を継ぐ子どもを授けてくださり、その血筋からやがてダビデ王が生まれることを語ってルツ記は締めくくられています。

七年間ともに暮らした夫と死に別れて、八十四歳になるまで、神殿を離れることなく断食して祈りながら昼も夜も主に仕えていた、今日の福音のアンナは、そのような生活の中でついに幼子イエスを自分の腕に抱き上げる喜びに満たされたのです。ルツ記に語られているナオミの喜びは、こうして今日の福音のアンナの喜びとなり、わたしたちは聖書に語られているこの二人の女性の喜びの場に立ち会っているのです。今日、主の奉献の祝日に今日の福音を通して、わたしたちが信じている救い主イエス・キリストがわたしたちの中にもたらしてくださっている喜びに包まれたと思います。このミサの中でわたしたちが味わう喜びは、立春の寒さの中でほころび始めた春の兆しのようなものかもしれません。周囲の寒さが身に応える日々の中で、幼子イエスを囲んでその幼子イエスに見入った MARIA 様とヨセフ様、シメオンとアンナを包み込んでいる春の兆しのような喜びを、わたしたちの信仰のうちに見出す恵みを願い合いたいと思います。そのような想いに結ばれて、主の奉献の祝日のミサをともにしたいと思います。